みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

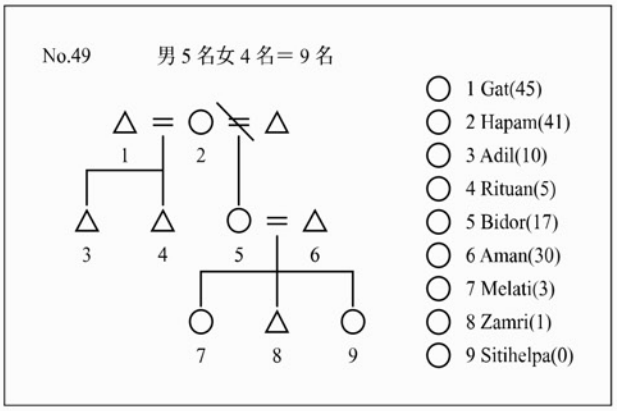
# Life World of Kampung Durian Tawar : Hierarchy and Household among the Orang Asli, Malaysia



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 信田, 敏宏<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15021/00004003 |

アヤップはドイエスのドリアン果樹園を単価の高いドリアン・カーウィン（*durian kahwin*）に植え替えた。したがって，この家のドリアン収入は，ドリアン果樹園の規模は小さいにもかかわらず，バティン・ジャングットらに迫る勢いであった。ゴム園も所有しているというが，世帯調査当時はゴム採液作業の仕事はしていなかった。

アヤップは村の人びとに対してドリアンの苗木を安く購入してあげたり，ランブータンの世話の仕方などを教えてあげたりしていた。村の政治に対して，彼自身はほとんど興味がないようであった。彼は猟銃を保持しており，そのこともあってか酔漢たちも彼にからむことはなかった。また，彼はキリスト教徒であるが，妻はキリスト教に改宗していなかった。しかし，「その後」，ドイエスはキリスト教へ改宗した。



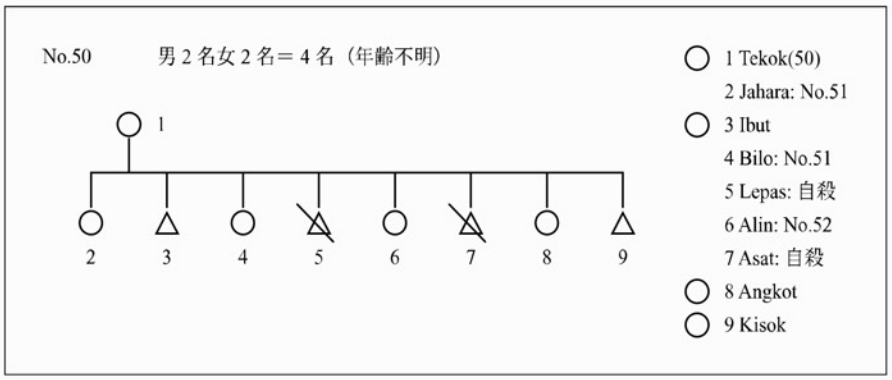

No. 49

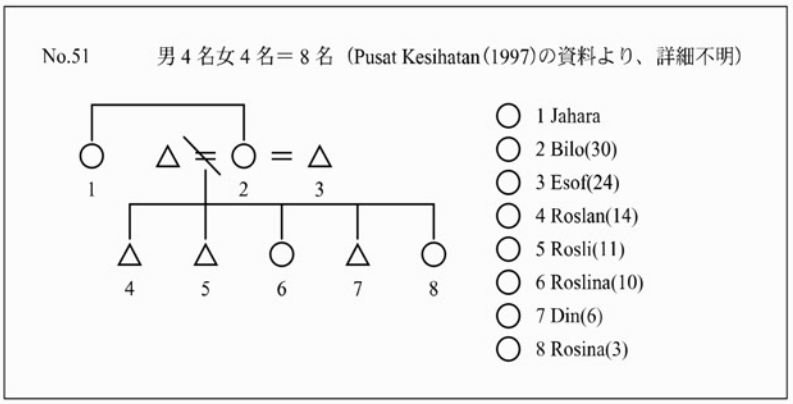
ガット（Gat）の生まれは複雑である。彼の父ジャスィン（Jasin）がムンタ（No. 10）と「結婚」する前にガットは生まれていた。ガットの実母は「行方不明（*hilang*）」らしい。アジョイ（No. 29）はムンタとパンリマ・クチィル（Panglima Kecil）との間にできた子供である。アジョイには同母同父の弟がおり Kg. Guntur に婚出していた。夫パンリマ・クチィルの死後，ムンタはジャスィンと再婚し，クタム（No. 10）を産んだ。

ガットは，前妻ロドー（Lodoh）（No. 60）との間にも子供がいるが，ロドーとは離婚した。その後，ハパム（Hapam）と再婚した。ハパムはかつてプルタンの華人を「夫」としていた。娘ビドール（Bidor）はその前夫との子供である。ビドールはすでに結婚しており，夫はクナボイ（Kenaboi）のドゥスン・クブール村に近いトホール村（Kg. Tohor）出身である。世帯調査当時，夫は華人による日雇い労働に従事していた。

ガットはゴム採液作業の仕事をしていた。また，村のあちこちにドリアンを植えており，ドリアンによる収入もあった。それらのドリアンは普通ならば人が敬遠するような場所――急勾配で運搬が困難な場所――にある。また，プタイなどの森林産物採取の仕事もしていた。バイクには乗れないので，自転車と徒歩で出かけていた。

「その後」，ガット一家はいわゆる象皮病になった。私は，顔面にできものができて，人相が変わったガットに再会したことがある。スランゴール州のゴンバック（Gombak）にあるオラン・アスリ専門の病院に入院したが，村に帰ってきてしまった。「その後」，彼らはキリスト教へ改宗した。

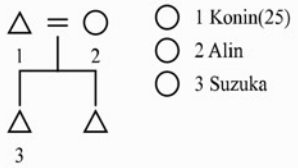



No. 50，No. 51，No. 52

テコッ（Tekok）はジェナン・キチョイの長女であるが，他のキョウダイとは母親が異なる。世帯調査当時，シアラン地域のドリアン果樹園の小屋に住んでいた。ゴム採液作業の仕事もしていた。息子のキソッ（Kisok）がゴムを仲買店まで運んでいた。

No.52　男 3 名女 1 名＝ 4 名（Pusat Kesihatan（1997）の資料より、詳細不明）




娘ジャハラ（Jahara）（No. 51），娘ビロ（Bilo）（No. 51），娘アリン（Alin）（No. 52）はイスラームへ改宗した。息子たちはイスラームへ改宗していないというのだが。シアランで娘アンコット（Angkot）と住んでいた。

No. 50 から No. 52 に対しては，世帯調査を行なわなかった。世帯調査を拒否されたからである。アドゥナン（No. 46）が彼らに指示したらしい。したがって，彼らの世帯の成員の詳細なデータは手にいれていない。子供たちのほとんどは学校に通っていなかったし，森での生活を好み，村の人びととはほとんど交流していなかった。

ゴム採液作業の収入（キソッが運搬）とドリアン収穫の収入以外には，これといった収入源はなかった。No. 51 と No. 52 についてはイスラームへ改宗したので，その援助金で生活していると思われる節があった。クアラ・クラワンのオラン・アスリ局まで援助金を受け取りに行った帰りに，プルタンの華人の店で買い物をする彼らを見かけることがよくあった。娘たちの家（No. 51，No. 52）はいずれも PPRT のプロジェクトによって建てられたものだが，家具というものはほとんどなかった。

テコッの息子アサット（Asat）は農薬を飲んで自殺した。エンタッ（No. 53）の娘で現在はゴベッ（Gobek）の妻であるインガッ（Ingak）（No. 55）の前夫ルパス（Lepas）もまた農薬を飲んで自殺した。こうしたことからも彼ら家族の困窮がうかがえる。

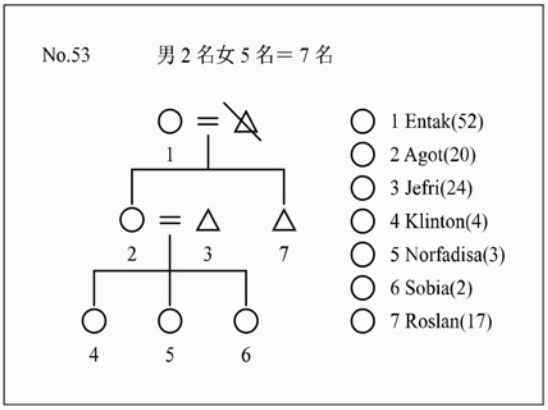
ルティン（Leting）はアル（No. 22）に妻をとられたが，何も文句を言わなかった。その後，ルティンは母の異母同父キョウダイであるダオの娘と再婚した。その結婚はタンカップ・バサーによる結婚であったが，2 人を捕らえたのはカトゥップ（No. 44）であった。相手の娘は，華人男性と 2 度結婚しており（1 週間，一緒に過ごしたのを「結婚」というのならだが），ルティンで 3 度目の結婚であった。ルティンはカトゥップやウレッとつるんで，酒を飲んでいた。森林産物採取の稼ぎを酒代に使っていたのである。

ビロ（Bilo）の息子ロスリ（Rosli）がアマンの店の手伝いをサンカム（No. 42）に

代わってするようになったが，彼の父親アリー（Alih）は12人の「妻」があちこちにいると言われていた。世帯調査当時は，Ulu Jelebuに住んでいた。村々を転々として，「妻」と関係を持ち，子供をつくっていったのである。そのうちの1人がビロということになるが，ビロは別の男性と「再婚」して子供もいた。

アリン（Alin）の夫はコニン（Konin）（No. 52）だが，村では彼のことをハジ・コニン（Haji Konin）と呼んでいた。彼はバティン・ドゥラマンの息子である。妻はバティン・ドゥラマンのキョウダイのジェナン・キチョイの孫であるから，彼らもまた近親婚である。かつて彼らの赤ん坊が亡くなってギラン村の墓場に葬ろうとしたとき，その赤ん坊がまだ生きていることにギラン村のマレー人の人びとが気づき葬式が中止された出来事があった。オラン・アスリの場合なら，死んでいないことに気づかないでそのまま埋葬してしまうであろうとアサット（No. 19）は語っていた。この出来事は，ムスリムであるならば，墓場を別の場所にする必要があることを村の人びとに印象づけた。

No. 50，No. 51，No. 52の世帯構成員，および年齢などの個人情報は不正確である。さしあたり，保健所（Pusat Kesihatan）の名簿を参照したが，その名簿もまた彼らの世帯構成員を十分に把握しているわけではない。

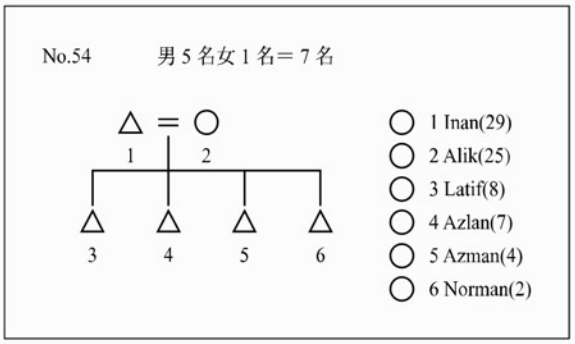



No. 53

エンタッ（Entak）はバティン・ドゥラマンの娘であり，亡夫サキット（Sakit）はジェクラーの称号を保有していた。しかし，テレビなどの電気製品を次々に購入し，月賦を返済できず取り上げられるなど，アダット・リーダーとしての能力はなかった。

娘アゴット（Agot）はイスラームに改宗しており，プルタン北部のランゴイ村（Kg. Rangoi）の男性と結婚した。彼女はかつて，エジャ（Eja）（No. 62）の弟にレイプされたことがあり，それはアダットに従って処理された。

エンタッは息子ロスラン（Roslan）と住んでいる。世帯調査当時，収入はエンタッとイナン（Inan）と結婚している娘アリッ（Alik）（No. 54）によって行なわれているゴムの採液作業に依存していた。しかし，その収入はわずかで子供たちは常に栄養失調ぎみであった。



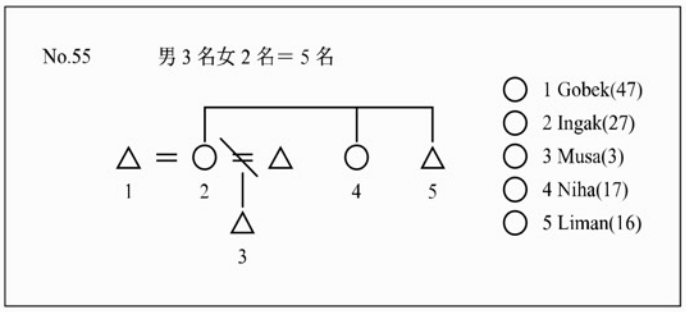

No. 54

イナン（Inan）は酔漢であり，ユウ（No. 17）やキオップ（No. 60）と同様に酔って暴れる厄介な人物である。パハン州出身である。世帯調査当時は，ブディルの大工仕事を手伝っていた。酒を飲まなければ問題はないのだが，一旦酒が入ると言動が荒くなり，しばしば喧嘩沙汰を引き起こしていた。

妻アリッのゴム採液作業が主な収入源であった。イナンは自分の稼ぎのほとんどを酒に使ってしまっていた。子供はいずれも栄養失調状態であり，学校にも通っている様子はなかった。家は PPRT のプロジェクトで建てられたが，家具と呼べるものはなく，コンクリートの床にパンダヌスのござを敷いて，粗末な布をかぶって寝ているようであった。

No. 55

ゴベッ（Gobek）はアキ・マイン（No. 57）の娘モイェット（Moyet）と結婚していたが，モイェットが死亡した後，妻インガッ（Ingak）と再婚した。ブキット・ランジャン村出身である。インガッ（Ingak）はゴベッとは 20 歳も年が離れている。ゴベッとは 3 度目の結婚であった。最初の夫はテコッ（No. 50）の息子ルパス（Lepas）




であるが，彼は農薬を飲んで自殺した。2 番目の夫は，パハン州出身のジャクン（Jakun）の男性であったが，離婚した。2 番目の夫との間に子供がいるが，ゴベッとの間の子供は 1996 年 12 月に死亡した。栄養失調が原因であった。

妹ニハ（Niha）と弟リマン（Liman）が同居していた。世帯調査当時，彼らは日雇い労働に従事していた。ゴベッ夫婦はゴム採液作業に従事していた。ゴム園はゴベッとインガッがそれぞれ所有しており，ドリアン果樹園はインガッの親族が所有するものであった。

「その後」，キリスト教へ改宗した。

## 6.8　アキ・マインの親族群

No. 56 から No. 63 は，アキ・マインがブキット・ランジャン村から移住した際に連れてきた妻のキョウダイたちの親族群である。当初は，「上の人びと」の住む居住

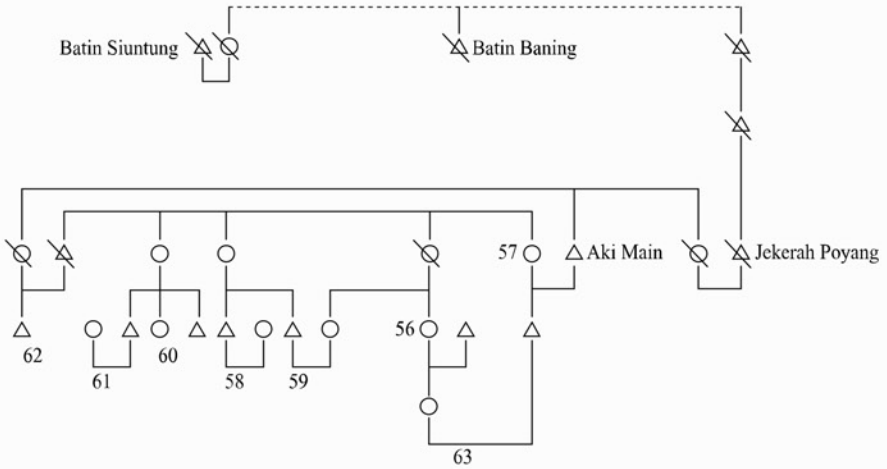
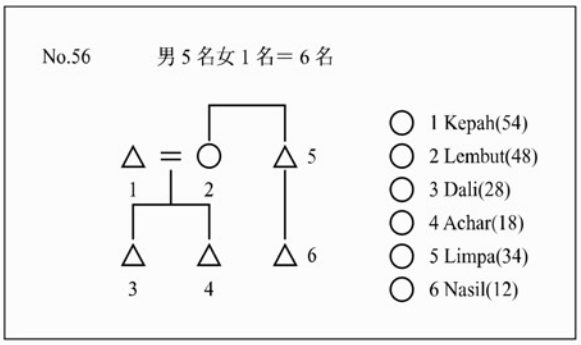



**図 16**　No. 56 から No. 63

地地域に住んでいたのだが，「上の人びと」と折り合いが悪くなり，アキ・マイン所有のドリアン果樹園の地域に移住した。



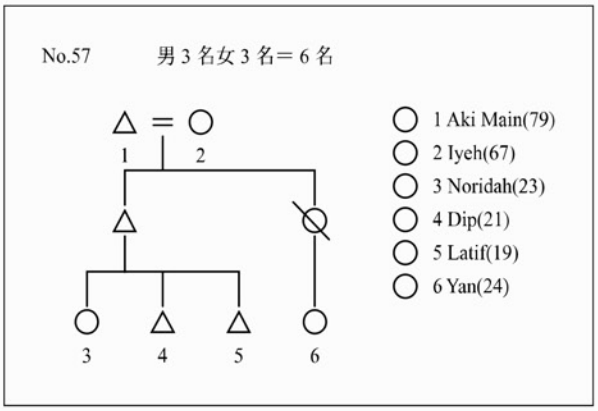

No. 56

クパー（Kepah）夫婦はイスラームへ改宗していた。クパーはスランゴール州出身である。彼は，イスラーム宣教活動に嫌気がさして，妻ルンブット（Lembut）と共にドリアン・タワール村に逃げてきたが，結局，イスラームへ改宗した。世帯調査当時，ニワトリ小屋のプロジェクトを支給されていた。息子ダリ（Dali）だけがイスラームへ改宗していなかった。

ルンブットの実父は不明だが，バダッ（No. 32）は義父である。また，同母異父キョウダイであるリンパ（Limpa）がその息子ナシル（Nasil）と共に同居していた。リンパは妻に逃げられた。リンパは世帯調査のとき，自分はイスラームではないと私に語ったその直後，金曜日の礼拝に出かけた。ダリは精神を病んでいて，酒飲みであった。息子アチャール（Achar）はゴム採液作業の仕事に従事していた。娘ロスナー（Rosnah）はスディン（Sudin）（No. 63）の 2 番目の妻である。ルンブットの母とスディンの母は姉妹であるため，彼らの結婚はニュンバン（*nyumbang*：母方平行イトコ婚）であった（信田 2002）。

1998 年 4 月にウンダン（Undang）が村に訪問したときに，イスラームの教えについてのパンフレットが配られたが，ギラン村のイスラーム教師に「これを読めるか」と訊かれ，申し訳なさそうに首を横に振るクパーの姿が村のイスラーム改宗者の実態を象徴していた。

リンパは，2003 年 8 月に亡くなった。遺体を村の墓地に埋葬するか近隣のマレー人墓地に埋葬するかということをめぐってもめたが，結局，村の墓地に埋葬されることになった。




No. 57

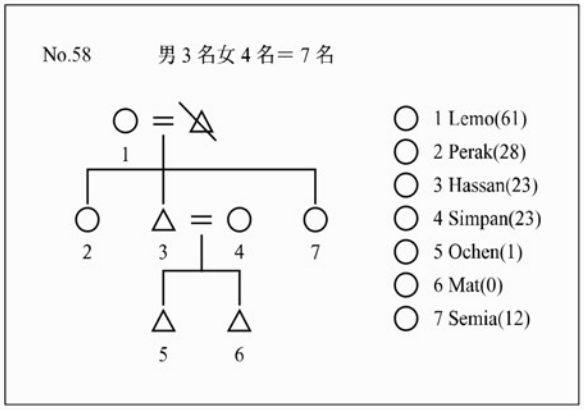
アキ・マイン（Aki Main）は，高齢ながら権力志向が強く，バティン・ジャングットに対するライバル意識が強い。彼は「呪術師（*dukun*）」として知られており，呪術力でもバティン・ジャングットに対する対抗意識が強いようである。「非常事態宣言期」には軍に協力し，共産ゲリラに加担した親族を密告したと言われている。独立後も軍に勤務していた。その間，ブキット・ランジャン村に住んでいた。妻はブキット・ランジャン村出身である。引退後，妻の親族と共に帰ってきた。最初は親族のいるアカイ村（もともとは Batu 47 らしい）に住んでいたが，村の人びととトラブルを起こし，ドリアン・タワール村に移住した。

最初は現在のマンク・ハシム（No. 9）の屋敷地付近に住んでいたが，義兄のムンキン（Munkin）（呪術師（*dukun*）としてはアキ・マイン以上に有能であった）の死亡後，現在の場所（彼らの果樹園がある場所）に移住した。アキ・マインのキョウダイには，オタ（No. 1），アバイ（No. 13），ポラン（No. 37），ルナス（No. 40），ポン（No. 41）の母親がいる。妻イェー（Iyeh）の姉妹はルンブット（No. 56）の母，ルモ（Lemo）（No. 58），ミチ（Mici）（No. 60）などがいる。つまり，本来ならば，ドリアン・タワール村出身ではない新居住者なのだが，自らの親族を引き連れて一つのグループを形成しているのである。このグループは村の行事や儀礼には参加していなかった。

世帯調査当時，毎日曜日ごとには，インド人やマレー人などが「施療」を受けるために，アキ・マインの家に訪れていた。アキ・マインの呪術力は，日頃の彼をよく知っている者ならば信用しないのだが，外部の者にはそのことが分からないようであった。1 回につき 100 リンギットほどの「施療料」をとり，そのほとんどが酒代に使われていた。

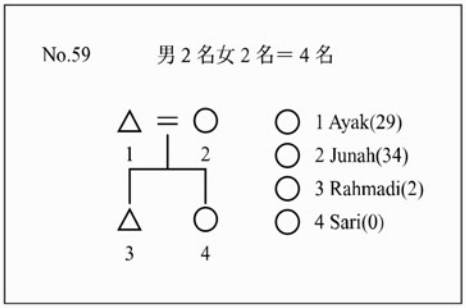
また，ブキット・ランジャン村が高速道路建設のために土地が回収され，土地の補償金（実際にはドリアンの果樹の補償金）を彼らの親族が受け取っていた。

世帯調査当時，ユウ（No. 17）の前妻マガ（Maga）（死亡）の子供やゴベッ（No. 55）の子供が同居していた。ゴム採液作業の仕事はしていなかった。収入のほとんどは，アキ・マインの呪術師としての収入とブキット・ランジャン村の補償金であった。ドリアン果樹園を所有しており，その収入もあった。




No. 58

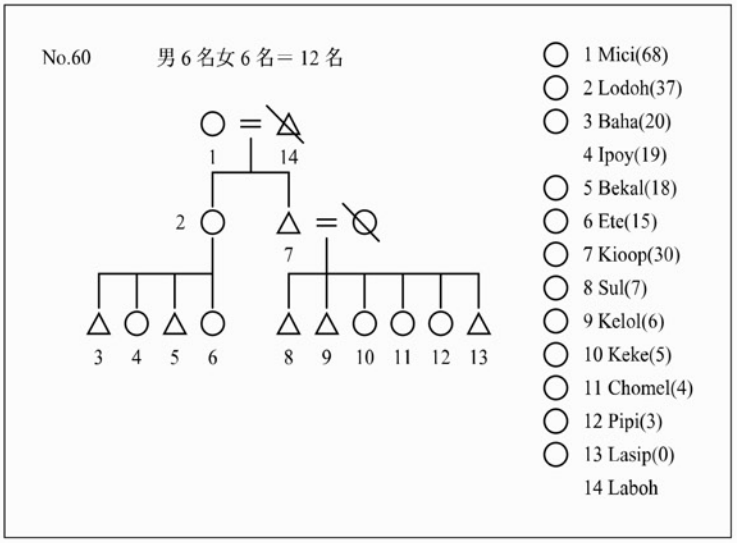
ルモ（Lemo）はアキ・マイン（No. 57）の妻イェーの妹であり，アキ・マインの家族についてきた。長女ペラッ（Perak）は身体に障害を負っている。息子ハサン（Hassan）はゴム採液作業の仕事をしていた。酒飲みであった。妻シンパンは，ルンバウ出身である。ルモは高齢にもかかわらず，日雇い労働の仕事をしていた。娘ザリナ（Zarina）はスンガイ・マハン村の男性と結婚し，婚出した。



No. 59

アヤッ（Ayak）はルモ（No. 58）の息子である。世帯調査当時，豚肉業者の仕事を手伝っていた。妻ジュナー（Junah）はスディン（No. 63）の妻であったが離婚して，アヤッと再婚した。ジュナーの母はルンブット（No. 56）の母と同一人物であり，スディンの母やアヤッの母とは姉妹である。したがって，スディンともアヤッとも母方の第1イトコにあたる。この結婚もまた，母方平行イトコ婚であった。

アヤッをはじめとするアキ・マイン派の次世代の人びとは，ブキット・ランジャン村で育っていた。そのため，ドリアン・タワール村の生活スタイルにはなじめず，どちらかといえば「外の仕事」を好む傾向が強い。それは，ブキット・ランジャン村の生業のほとんどが，「外の仕事」に依存する「都市的」なものであることも関係しているのかもしれない。したがって，ゴム採液業を中心とする村の人びととはつきあいがあまりない。




No. 60

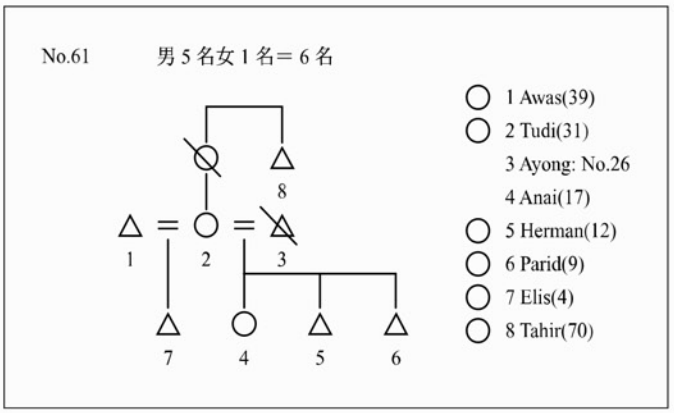
ロドー（Lodoh）は「軽い精神病（*sewel*）」と言われている。私には，困窮生活が続き，考えることを拒否しているように思えた。かつて，ガット（No. 49）と結婚していたが，離婚した。ゴム園は弟キオップ（Kioop）が「賃貸」しており，その収入のほとんどはキオップの酒代に消えていた。母ミチ（Mici）は「目が見えない（*buta*）」。父ラボー（Laboh）は「聾者（*pekak*）」であったらしい。ラボーはバチャッ（No. 12）

とキョウダイである。

ロドーは日雇い労働に従事していた。ガットとの子供も同居していた。娘イポイ（Ipoy）はスランゴール州へ婚出していた。

キオップは妻ミラ（Mila）（ブキット・パヨン村出身）を 1996 年に出産時に亡くしてから，生活が荒れ始めた。酒飲みで周りの者に迷惑をかける最も厄介な人物であった。妻がキリスト教に改宗していたので，キオップもキリスト教に改宗していた。ゴム園を華人に「賃貸」している。アマン（No. 9）から月々の収入（150 リンギット）を受け取ることになっていたのだが，ある時，華人の家まで酔っぱらって押しかけたことがあった。ブキット・ランジャン村の補償金のほとんどは酒代に使われた。

「その後」，キオップは，子供たちと共に妻の出身村であるブキット・パヨン村に住むようになった。




No. 61

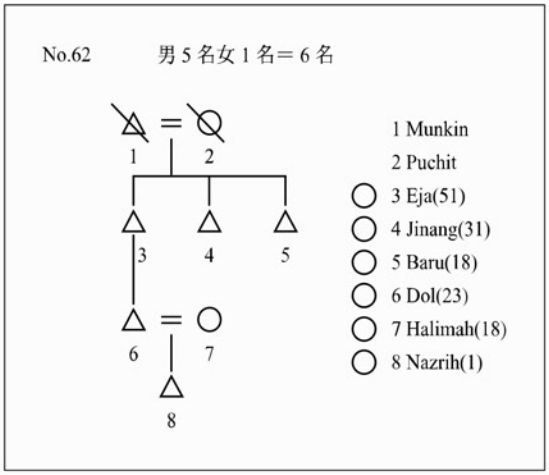
アワス（Awas）はロドー（No. 60）やキオップ（No. 60）のキョウダイである。彼だけはゴム採液作業に従事しており，ゴム園の脇に家を建てて移住した。クバン（Keban）という彼らのキョウダイの 1 人は，カル（No. 8）の娘と結婚していたが，木材伐採作業中に倒木にあたって死亡した。子供たちはカルが引き取って育てていた。

ラボー（Laboh）のゴム園を相続したのは彼だが，ドリアン果樹園は所有していない。ほとんどの収入をゴム採液作業から得ていた。

妻トゥディ（Tudi）はポテー（No. 26）の息子アヨン（Ayong）と結婚していた。アヨンが死亡した後，アワスと再婚した。父親は華人である。娘のアナイ（Anai）は，

パハン州へ婚出。母のキョウダイであるタヒール（Tahir）をひきとって世話をしていた。タヒールはかつてイスラームへ改宗したことがあるというが，現在はそうではないと主張していた（記録上はムスリムだが）。タヒールはほとんど毎日プタイの採取に出かけていた。

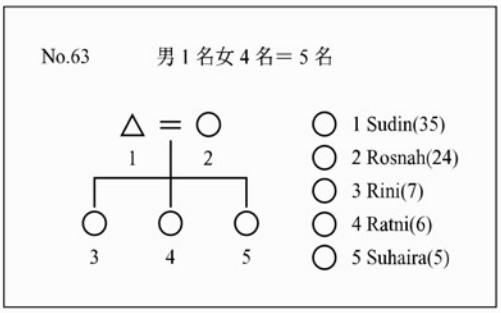
アワスは「上の人びと」に従い，しばしば儀礼に参加していた。家は PPRT のプロジェクトによって建設されていた。




No. 62

エジャ（Eja）の父はムンキン（Munkin）でアキ・マイン（No. 57）の妻らとキョウダイである。有能な呪術師であったと言われている。母はプチット（Puchit）といって，アキ・マインとキョウダイである。つまり，アキ・マインとムンキンはそれぞれの姉妹を交換していたのである。エジャは妻とは離婚しており，息子ドル（Dol）はすでにトホール村（Kg. Tohor）の女性と結婚していた。ドルはしばしばブディル（No. 12）の仕事を手伝ったりしていた。エジャには弟ジナン（Jinang）とバル（Baru）がいて，同居していた。男所帯の彼らの食事は，彼らにとっての親族であるアキ・マインの家などで食べていた。ジナンは耳が少し遠く，キオップと行動を共にしていた。

日雇い労働や森林産物の採取で生計をたてていたが，しばしばゴム採液作業の仕事も行なっていた。ゴム採液作業の仕事を行なっていたのはエジャとドルのみである。エジャも酒飲みであった。




No. 63

スディン（Sudin）はアキ・マイン（No. 57）の息子であり，車を所有しアキ・マインの「運転手」をしていた。それ以外に彼が仕事をするのを私は見たことも聞いたこともなかった。前妻は母方第 1 イトコのジュナー（No. 59）であり，現在の妻は母方第 1 イトコのルンブット（No. 56）の娘ロスナー（Rosnah）である。

## 7　結　語

長期調査の後，村を再び訪問したとき，さまざまな変化を見聞した。アルの離婚やキオップが村を出ていったこと。そして，新たに結婚した若者たちや，新居を建てた村の人びと。「行く川の流れは絶えずして，しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは，かつ消えかつ結びて，久しく止まる事なし。世の中にある人と住家と，またかくの如し」。まるで，この『方丈記』を想起するような村の変化を目のあたりにすることで，村の社会史を記録しておく必要性を私は強く感じた。村の状況というのは静態的というよりも動態的に捉える必要があるのだが，まず行なうべきことはある時点での村の状況を歴史的な変化のなかに位置づけながらも，静態的に把握することなのではなかろうか。こうした問題意識が，本稿執筆の背景にある。

本稿の前半部では，ドリアン・タワール村の歴史をたどり，「上の人びと」と「下の人びと」の階層化の過程を明らかにし，世帯調査結果，ゴム採液による収入，ドリアン収穫による収入のデータを用いることによって，「上の人びと」と「下の人びと」という階層秩序の経済格差を実証した。

後半部の世帯の記録では，世帯主を中心として彼らの生活の特徴を記述した。彼らの生活実態の特徴は多岐にわたり，本稿でそれを一言でまとめることはできない。いかなる場所であれ，村の人びとの生活というのは多様性に富んでいる。村は決して一

枚岩ではない。しかし，村や共同体というのはしばしば一枚岩的に語られる存在でもある。私もまた「ドリアン・タワール村では」とか「オラン・アスリの人びとは」という言い方をしている。私はこのことに常にジレンマを感じながら「民族誌」を書いている。「世帯の記録」を提示することで，そうしたジレンマがどこまで解消されるのか分からないが，少なくとも「村の人びと」として表現している人びとがどういう人びとであるのかということだけは分かってもらえたのではないかと考えている。

「世帯の記録」には，前半部で分析したようなドリアン・タワール村の階層秩序とは異なる実態が見え隠れしている。例えば，「上の人びと」のなかには裕福でない人びともいるし，「下の人びと」のなかにも「上の人びと」と同様な経済力を持つ人びともいる。ドリアン・タワール村の現況を把握するためには，「上の人びと」／「下の人びと」という概念は確かに有効なのだが，その一方で，これらの概念によって見落とされる現実もある。こうした現実をすくいあげ，それらを民族誌という枠組みのなかにいかにして取り込んでいけるのか。その可能性を示しているのが，「世帯の記録」なのである。

「世帯の記録」の記述によって意図しているのは，一方では，上述したようにこれまで発表してきた拙稿で省略した村の人びとの生活実態を可能な限り提示することであるが，他方では，個々の微細な事例に着眼することで研究テーマを発見していった私の研究方法を明らかにすることでもある。ドリアン・タワール村は現在でも変化の過程のなかにある。村の変化を継続的に観察していく場合に，本稿で提示した「世帯の記録」のような具体的なデータは，今後の調査研究において有用であろう。

以下では，ドリアン・タワール村の生活世界の一端を把握するために，「世帯の記録」について若干の分析を試みる。

ドリアン・タワール村の生業は，ゴム採液やドリアン収穫ばかりではない。狩猟採集活動や日雇い労働など，彼らの生業は多岐にわたっていることが「世帯の記録」からもうかがえる。

ゴム園を所有している世帯のなかには，ゴム園の一部を華人などに「賃貸（*pajak*）」している世帯がある。土地の私有権がないオラン・アスリ保留地では公的には不可能な賃貸方法であるが，実際にはこのような形で土地の賃貸が行なわれているのである。しかし，非合法であるからこそ，賃貸料は低額である。その一方で，借りる側にもそれなりのリスクが伴う。たとえば，採液したゴムを盗まれた人は，警察に通告することはできないので，泣き寝入りするしかないのである。実際に，ゴム泥棒の話は

頻繁に耳にした。

このようにゴム園を「賃貸」している世帯の世帯主の多くは，バティン・ジャングットの息子ティカッ（No. 18）に従っている。ティカッがこうした賃貸方法を彼らに教えたのである。ゴム園を賃貸して，従来の狩猟採集活動に従事するというやり方である。しかし，ゴム採液業に従事することを奨励するバティン・ジャングットはこうしたやり方を好まない。このように考えると，村内ポリティクスを開発という観点から理解するためにも，ゴム園の「賃貸」の問題は重要になってくる。

ゴム採液業に従事する者たちの収入はおおむね安定している。それは，彼らの世帯状況からも明らかである。開発プロジェクトの浸透度は，ゴム採液業による収入に反映されていると言える。一方，ドリアン収穫は，現在の彼らの「努力」よりも一世代前の人びとがドリアン果樹園をどのように整備していたのかということに応じて収入に格差が見られる。したがって，ゴム採液業にあまり関心を持たないアリ派の子孫の人びとにも，ドリアン収穫による収入がもたらされているのである。すなわち，ドリアン栽培は，ゴム採液業のように，開発という脈絡で捉えることが困難なのである。

狩猟採集に従事する者たちの収入は森林資源の有無によって左右されるのだが，森林伐採や開発による森林環境の悪化に伴い，従来のようには森林資源を確保することができなくなっている。狩猟採集活動に頼れなくなった彼らは困窮し，不慣れな日雇い労働に従事したりするようになる。狩猟採集に従事する者たちの村での評価はあまり良くない。あらかじめ述べておきたいのは，狩猟採集に従事する人びとに対する否定的イメージは，分析者・観察者である「私」の個人的な印象だけではないということである。

ドリアン・タワール村の生活は，狩猟採集を中心とした移動生活から，水田・ゴム採液業などの定住生活に移行している。こうした生活環境の変化を推進したのは，市場経済化や政府による農業開発であった。開発過程において，ドリアン・タワール村では，開発を受容する人びとと拒否する人びとに分裂した。こうした分裂状態は，「上の人びと」と「下の人びと」という表現に収斂されるようになっていく。

開発を受容した人びとと開発を拒否した人びととの関係は良好とは言えない。こうした関係性のなかから，さまざまな語りが表出している。狩猟採集に対する否定的なイメージもこうした関係性のなかから生まれたものである。このことをどのように考えたらいいのか。ヒントは，以下のような自省的な思考にあると考える。

開発を受容した人びとが狩猟採集活動に対して否定的なのは，狩猟採集活動に否定的な開発の論理を彼らが受容したことの証左である。政府による開発プロジェクトを

受容し，ゴム採液に従事するような人びとの価値観の一部は，実は，開発の論理が定着する過程で構築されたものなのではないかと考えられる。卑近な例で言えば，テレビや冷蔵庫を所有していることが裕福であることの象徴となっていることは，開発過程のなかで定着した論理である。さらに言えば，裕福な「上の人びと」や貧乏な「下の人びと」という区分でさえ，開発の論理によって構築されたものである。このように，狩猟採集生活に対する否定的イメージや裕福な「上の人びと」と貧乏な「下の人びと」の区分は，村の人びとのなかに開発の論理が定着していることを示している。

調査者である「私」は，開発の論理によって構築された村の人びと（特に，開発を受容した「上の人びと」）の考え方を無意識に採用していた。私は，いわば開発をする側の論理のなかに組み込まれた状態のなかで，ドリアン・タワール村の階層秩序や経済格差について考えていたのである。例えば，「世帯の記録」における「下の人びと」に対する私のまなざしには，「上の人びと」による「下の人びと」に対するまなざしの影響が明らかに見られる。今後は，こうした分析方法を再考して，開発の論理によって構築された村の人びとの視点を相対化した上で分析を進めていかなければならないであろう。

次に，複雑な親族関係がもたらしている意味について考えてみたい。

「世帯の記録」によって明らかになっているのは，ドリアン・タワール村における親族関係とその複雑さである。たとえば，対立しているバティン・ジャングットとアキ・マインは，姻族どうしである。さらに，バティン・ジャングットの側近であるアバイ（No. 13）は，アキ・マインの「姉妹の息子（*enekbuah*）」である。「上の人びと」と「下の人びと」の間には，こうした幾重にもつながった親族の関係が見られる。ドリアン・タワール村の村内ポリティクスを見る場合，たんに対立している派閥を考察するだけでは不十分であり，このような複雑な親族関係を把握する必要がある。そして，より重要なことは，対立している人びとが親族どうしであるということである。

こうした複雑な親族関係の分析にとって重要なのは，女性たちの関係である。「世帯の記録」から明らかなように，多くの人びとは妻方居住を実践している。妻方居住によって構成される世界では，女性たちの親族関係は重要である。なぜなら，男性たちは他の場所に移住したり，他の場所から移住したりしてくるが，女性たちは動かないからである。アキ・マイン派の人びとが村の人びとと交流しないのは，アキ・マイン派の女性たちが，ドリアン・タワール村の出身ではないので，村の女性たちと血縁関係がないことに遠因がある。「世帯の記録」は親族群ごとに区分されているが，多くの親族群は女性側の親族関係によって結びついているものなのである。

親族関係は，民族の境界を越えて広がっている。「世帯の記録」を読んでみると，マレー人や華人という他民族との通婚の事例ばかりでなく，他のオラン・アスリの下位民族集団との通婚の事例も多いことが分かる。ドリアン・タワール村の人びとは，トゥムアン（Temuan）という下位民族集団としてカテゴリー化されているが，実際には純粋なトゥムアンを探すことの方がむつかしい。

彼らにとっての「生活世界」というのは，ある意味ではこのような「親族の世界」に限定されていると言える。彼らの人間関係は，親族関係に基づいている。親族の論理に基づく世界に彼らは生きているのである。こうした視点は，ドリアン・タワール村の生活世界を考察する際には重要である。村の政治的，経済的，そして社会的な現象を説明する場合には，必ずと言ってよいほど，親族の論理あるいは親族関係の脈絡というものを参照しなければならない。

たとえば，イスラームやキリスト教への改宗問題。これは，現在のオラン・アスリ社会では最もホットな話題である。これもまた親族関係の脈絡から考察することができる。

オラン・アスリの集落には，必ずと言ってよいほど，イスラーム改宗者やキリスト教改宗者がいる。こうした宗教への改宗は，村の社会秩序に不調和をもたらしている。ドリアン・タワール村も例外ではない。

拙稿では，イスラーム化への抵抗の源泉は，オラン・アスリとしての誇りとイスラーム化を強いる国家に対する怒りの心情であると結論づけた（信田 2004）。その根拠の一つも「世帯の記録」から得ることができる。

イスラームやキリスト教は，村の人びとにとってあまりにもリアルな問題である。なぜなら，彼らの身近な親族の誰かがイスラームやキリスト教へ改宗しているからである。「世帯の記録」には書ききれなかったが，彼らには村の親族ばかりでなく，村外の親族にもイスラーム改宗者やキリスト教改宗者がいる。改宗者についての彼らの語りは，改宗者についての一般的な見解ではなく，身近な親族のリアルな現実から生成した語りなのである。イスラーム化に抵抗しているバティン・ジャングットですら，自分の娘や息子，そして孫がイスラームへ改宗している。おそらく，ドリアン・タワール村では，身近な親族に改宗者がいない人を探すことはできないであろう。

このように，「世帯の記録」で描かれているドリアン・タワール村の状況には，生業の分化，通婚・混血，改宗など，さまざまな形での異化作用が反映されている。たとえば，オラン・アスリは「森の民」であるという言説が存在するが，ドリアン・タワール村の状況から判断すると，そうした言説は必ずしも事実ではない。出自の面か

ら見ても，オラン・アスリにカテゴリー化されている人びとのなかには，マレー人や華人の「血筋（*keturunan*）」を持つ人びとがいる。さらに，宗教については，イスラーム改宗者もいれば，キリスト教改宗者もいる。他地域では，仏教やヒンドゥー教に改宗している人びともいる。多くのオラン・アスリは世界宗教への改宗を拒否しているが，だからといって，彼らに共通の信仰があるわけではない。ドリアン・タワール村で宗教色を帯びている「アダット」ですら，他地域では単なる「慣習」の位置を占めているにすぎない。

ドリアン・タワール村の「世帯の記録」を読み進めてみると，結局のところ，オラン・アスリとは誰かという問題にたどりつく。「世帯の記録」を作成してそれを分析していく過程で私が確信したのは，オラン・アスリというのは，マレーシアが国民国家を形成していくなかで，マレー人には分類することができない人びとをまとめたカテゴリーであるということである。したがって，オラン・アスリの世界が，「世帯の記録」に示されているような異種混淆的な世界を構成しているのは，ある意味で当然のことなのかもしれない。

こうした異種混淆の周縁世界のありさまは，本稿の冒頭で触れた政策論的なアプローチでは十分に理解することが困難であろう。政府の行政文書や新聞記事だけでは，オラン・アスリの村レベルの状況を把握することはできないし，行政文書のなかには間違った印象を与えるものもある。村の状況を把握した上で行政文書や新聞記事を読んでみると，さまざまな虚偽や隠蔽を読み取ることさえできるのである。人類学が得意とするのは，まさにこうした異種混淆的な周縁世界の研究であると言えるかもしれない。

本稿では，ドリアン・タワール村の生活世界を解明することを目指して，世帯調査や集計調査によって得られたデータを提示しながら，議論を進めてきた。「世帯の記録」というのは，現時点での彼らの生活世界の一端を提示したものである。今後の研究課題は，「世帯の記録」に情報を加えながら，「変化」に焦点を当てた研究を進めていくことである。

## 謝　　辞

ドリアン・タワール村における継続調査は，以下の2つの科学研究費補助金による研究プロジェクトに参加したことにより可能となった。基盤研究A（1）「島嶼部東南アジアの開発過程と周縁世界：マイノリティ・境域・ジェンダー」（課題番号：14251006，研究代表者：加藤剛教

授（京都大学）），基盤研究 A（1）「東南アジア地方都市における都市化とエスニシティ形成の社会人類学的研究」（課題番号：14251007，研究代表者：合田濤教授（神戸大学））。

本稿は，2003 年 7 月 19 日，「たこけん」（杉本良男国立民族学博物館教授主催の研究会）において報告した内容（「ドリアン・タワール村の階層秩序――世帯調査を手がかりとして」）を大幅に加筆・修正したものである。研究会参加者の方々から，有益なコメントをいただいた。さらに，本稿作成に関しては，匿名のレフリーの方々から詳細かつ有益なコメントをいただいた。ここに記して深謝いたします。

## 注

1）本稿で私が目指しているのは，たとえば，松園万亀雄が提唱する「四畳半人類学」の方法である（松園 2002）。すなわち，マクロな諸問題を視野に入れながらも，まずは世帯調査から出発して身近な現象の考察・分析に専念するという研究姿勢である。
2）たとえば，加藤剛は，インドネシア，スマトラ島のコトダラム村における定点継続調査を通じて，インドネシアの開発過程を明らかにしている（加藤 2003）。
3）なお，本稿に関連するものとして，拙稿（信田 2004）がある。さらに，本稿の問題意識と密接に関連したものとして，私はすでに論文を発表している（信田 2000）。しかし，既発表の論文では，紙数の関係から，データの提示が不十分であった。本稿は，この既発表論文と部分的に重なることをあらかじめお断りしておく。ただし，本稿の後半部で提示する「世帯の記録」は初めて公表するデータである。本稿の前半部はこの「世帯の記録」を紹介するためのいわば「前座」となっている。
4）「マレー農村の 20 年」を描いた坪内良博の研究（坪内 1996）や，コトダラム村の 20 世紀を描こうとしている加藤剛の研究（加藤 2001）は本研究の模範となるであろう。

## 文　　献

Baharon Azhar Raffie'i
1972 *Some Aspects of the Relationship of the Orang Asli and Other Malaysians*. Kuala Lumpur: Jabatan Hal Ehwal Orang Asli.
1973 Parit Gong: An Orang Asli Community in Transition. Unpublished Ph.D. Dissertation. University of Cambridge.

Dentan, R. K., K. Endicott, A. G. Gomes and M. B. Hooker
1997 *Malaysia and the Original Peoples: A Case Study of the Impact of Development on Indigenous Peoples*. Boston: Allyn and Bacon.

Jimin bin Idris
1992 People's Participation in Development: A Case Study of a Successful Programme of an Orang Asli Settlement. Paper presented at the "Workshop on Penan Development: Towards Active Participation of the Penan Community in Development," organized by Angkatan Zaman Mansang (AZAM), 20–21 January, Marudi, Sarawak.

加藤　剛
2001「スマトラの村の 20 世紀――地域の歴史を描く」『アジア・アフリカ地域研究』1: 37–53。
2003「開発と革命の語られ方――インドネシアの事例から」『民族学研究』67(4): 424–449。

前田成文
1969「ジャクン・コミュニティの社会秩序」『東南アジア研究』7(3): 342–362。

松園万亀雄
2002「民族誌と個性――フィールドワークにおける『私』をめぐって」『社会人類学年報』28: 1–25。

Nicholas, Colin
2000 *The Orang Asli and the Contest for Resources: Indigenous Politics, Development and Identity in Peninsular Malaysia*. Kuala Lumpur: IWGIA/COAC.

信田敏宏
1999a「改宗と抵抗──マレーシアのオラン・アスリ社会におけるイスラーム化をめぐる一考察」『東南アジア研究』37(2): 257–296。
1999b「解決されないインセスト──オラン・アスリ社会におけるアダット，イスラーム，国家」『南方文化』26: 23–48。
2000「『上の人々』と『下の人々』──オラン・アスリ社会における開発と階層化」『社会人類学年報』26: 129–156。
2002「『間違った結婚』をめぐるポリティクス──オラン・アスリのアダットをめぐる一考察」『人文学報』（東京都立大学）328: 61–93。
2003「首長の罪と罰──マレーシア，先住民社会における慣習法」宮本勝編『〈もめごと〉を処理する』東京：雄山閣，pp. 52–73。
2004『周縁を生きる人びと──オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

坪内良博
1996『マレー農村の 20 年』京都：京都大学学術出版会。